

DSDP Leg 58 Site442~444, ODP Leg 131 Site 808から掘削された四国海盆基盤岩の再分析と、分析値の特徴

Re-mesasurement of the basement of the Shikoku Basin recovered by DSDP Leg 58 Sites 442~444 and ODP Leg 131 Site 808, and the characteristics of data.

*原口 悟¹、藤永 公一郎²、中村 謙太郎³、山口 飛鳥⁴、石井 輝秋⁵

*Satoru Haraguchi¹, Koichiro Fujinaga², Kentaro Nakamura³, Asuka Yamaguchi⁴, Teruaki Ishii⁵

1. 海洋研究開発機構、2. 千葉工業大学次世代海洋資源センター、3. 東京大学工学部、4. 東京大学大気海洋研究所、5. 静岡大学防災総合センター

1. Japan Agency for Marine-Earth Science and Technology, 2. Ocean Resources Research Center for Next Generation, Chiba Institute of Technology, 3. Faculty of Engineering, University of Tokyo, 4. Atmosphere and Ocean Research Institute, University of Tokyo, 5. Center for Integrated Research and Education of Natural Hazards, Sizuoka University

DSDP, ODPによる四国海盆基盤岩の回収は、四国海盆中央部のLeg 58 Site 442~444と、南海トラフ沈み込み帯のLeg 131 Site 808で行われている。これらの基盤岩の化学分析値は、DSDPおよびODPの報告書で報告されているが、Leg 58は1980年頃、Leg 131は1990年頃の分析である。このため、当時の分析手法の技術的制約から、特に微量元素の10ppm以下の低濃度の部分で精度が低く、現在の最新の分析手法による分析値と比較するには問題が多い。特に「元素比」を比較する場合、元素濃度の有効桁数が低いことから、有意な値が得られないことがある。2016年合同大会では、IODP Exp. 333 Site C0012で得られた四国海盆基盤岩に観察された変質作用を考察したが、比較対象として、Site 442~444, 808の基盤岩を用いている。この際、化学分析データが、DSDP, ODPの報告書以降、新たな分析の報告がなく、データが上記のような問題を含んでいたため、テキサスA&M大学に保管されているアーカイブサンプルを入手し、Exp. 333のサンプルと同じ分析手法で再分析を行った。本報告では、再分析されたデータが示す四国海盆基盤岩の化学的特徴、および再分析の「意義」について報告したい。

キーワード：四国海盆、背弧海盆玄武岩、化学分析、アーカイブサンプル

Keywords: Shikoku Basin, Back-arc basin basalt, geochemical measurement, Archive samples

